

私は夏まつりで「Ma j iでK o iする5秒前」を歌いました。練習時間をつくってがんばって練習しました。最初は声が小さかったり、ふりつけをまちがえて、何度もやり直しました。私達の番は一番最初だったのできん張したけど、歌っているうちにほぐれてきました。練習のときはうまく歌えなかったので、本番でまちがえずに歌えたとき、うれしかったです。……………(松本 麻里)

私は、夏まつりで「Ma j iでK o iする5秒前」を歌いました。曲じたいはむずかしくはないけど、なぜかすごく大変でした。歌う曲を決めるのに、時間がかかって、練習する時間が少なかったけど、みんなでガンバッテ、前日はグランドのステージで練習したけど、まちがえたり声が小さかったりして、結局当日もなかなかあわなかつたけど、本番ではちゃんとできて、うれしかったです。……………(永野 久美子)

ふれあい市のお礼と売上報告

田中野田子ども会育成会

会長 和氣 芳夫

過日開催しました「子ども会ふれあい市」につきましては、あたたかいご支援・ご協力をいただき誠にありがとうございました。役員一同厚くお礼申し上げます。

今後とも、子ども会・子ども会育成会にたいしまして、より一層のご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

項目	収入	支出
注文品売上	164,640	
当日売上	201,057	
注文品・当日品支払い合計		246,847
容器		840
合計	365,697	247,687

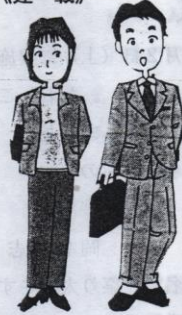
差引 ふれあい市収益 118,010円

共同募金のお知らせ

今年も共同募金の時期がやってきました。本来、共同募金は戸別に訪問してご寄付を戴くのが本意ですが、町内会費より支出するようになって久しいわけでありませう。

今年は町内会費より105,000円を支出しました。皆さんのお宅へは、毎年のことながら趣意書と赤い羽根をお配りしております。ご理解とご協力をよろしくお願いします。(町内会)

《連載》



わが郷土を語る(33)

中尾 佐之吉

「君」と「僕」のことばはいつから

幼なじみの思い出は
青いレモンの味がする
閉じるまぶたのそのうらに
おさない姿の君と僕

うえの歌詞は、永 六輔さん作詞の「幼なじみ」の一節でよく口ずさまれている歌だ。この詞のなかの「君」と「僕」ということばも、いまではどこでもつかわれていて、いまさらとりあげて何を云おうとするのかと思われるかもしれないが、これにも歴史があるわけで、前回の「さん、づけ、「ちゃん、づけを書いた以上、このことにも、触れずにはおられないのである。

- 1) 「君と僕」のことばは、この地方では、私が子どもの頃から私が小学校へ入ったのは大正12年であるが、最初の頃は、自分のことは「わし、友だちは「おめえ、」と言っていたと思うが、村長の息子か、転校してきた同級生が、僕とか〇〇君とか云うことばをつかうので、しだいに皆が君・僕をつかうようになったと思う。(註・小学校で3年生までは、女の先生が担任であったから、男の子でも「さん、づけで呼ばれ、「君、づけで呼ばれることはなかった。)
- 2) 「君と僕」のことばを教わった「藤村、島崎藤村著わす「生ひ立ちの記」によると、明治5年(1872)長野県木曾



白寿会・父兄も参加して、夏休みラジオ体操(一号公園で)

郡で生まれた藤村が、明治14年9歳のときに上京して、姉の婚家先へ寄寓し小学校へ転入することになる。…私の故郷の習慣で、他の朋輩を呼ぶには「わりゃ」と言ひ、自分のことはどんな目上の人の前でも「おれ」でしたが、その時都会の少年のやうに言葉遣ひを習ひ、「君」とか「僕」とかいふ言葉も姉からをそはりました。…と書かれている。(註・…内は、著書原文のままとした。だから、旧仮名遣いである。)

君とか僕ということばは、東京の方では、明治の初めにもうつかわれていたことが知られる。そうだとすると、このことばがこの地方にまで普及するには何十年もかかっているわけで、新聞やラジオ・テレビなど情報通信の発達普及した現在では考えられないようなことだ。

3) 君と僕のことばを、明治以前に使った人がいる。幕藩時代、四民の最上位に君臨していた武士たちは、自分を「拙者」と言ひ、相手を「貴殿」と呼んでいたであろうと思うのだが、江戸末期、かの尊皇の志士吉田松陰(1830~1859)は、そのようなことばを、ふだんは、あまりつかわなかつたらしい。

松陰は、長州藩内はもとより他藩の人とも交際が広く、それらの人々と交わした大変多くの書簡を残しているが、その中で自分のことは「僕」と書いている場合が多く、同輩以下の相手には、「君」ということばをつかっている。例えば、松陰が、野山獄の獄中から、9歳年下の門人高杉晋作(1839~1867)にあてた手紙(安政6年)に「…僕は君に負き父に負くの人…」というような字句がみられる。(註・君にそむき、父にそむくの人とは、父や晋作の期待をうらぎり、当時の国法を犯してアメリカ行きを企て、獄舎につながれるようになった自分という意味であろう。)

司馬遼太郎さんの「役人道について」という論文(文芸春秋所載)のなかで…桂小五郎(木戸孝允-1833~1877)は士分でありましたが、元来足軽身分とも言いがたかった時期の伊藤俊輔(伊藤博文-1841~1909)に対し「君と僕とは対等である」として上下の礼をとる必要がないといっている…と書かれている。つまり、君と僕という表現は、お互いが対等であり同志であることを意味していたわけである。

吉田松陰がつかった君とか僕ということばにもそのような思想がふくまれていたにちがいない。したがって、松陰門下生たちも、同志の一人として、進んでこのことばをつかっていたことが想像される。

明治維新によって、士・農・工・商という階級的身分社会が崩壊し、四民平等の社会になってみれば、サムライだったからといって「おい、その町人」などと呼び捨てにできないし、百性・町人だからといって、元士族を「おサムライさま」とたてまつる必要もなくなってみれば、長州で発明された「君」と「僕」が新語として登場し、一般化するのも、必然であったといえようか。

いま、あたりまえのこととしてつかっている、「君」と「僕」ということばも、維新時代の流行語(?)であったと、私は言ってみたいのである。ただし、国中に普及するには、相当の年月がかかったが…。